

《資料紹介》

渡邊滋あて坪井正五郎書簡一覧

— 二代目校長渡邊滋と坪井正五郎 —

林 宏一・高橋佐貴子

《A Report on Investigation of Museum Collections》

List of Letters from Shogoro Tsuboi to Watanabe Shigeru

Koichi HAYASHI, Sakiko TAKAHASHI

はじめに

本学博物館には校祖渡邊辰五郎翁の書状・書付のほかに、二代目校長渡邊滋自筆の書状・原稿類及び親交のあった知人・生徒等からの書簡類が相当数収蔵されている。ただ、それらの整理が十分行き届いていないため、その内容を詳しく紹介・解説する段階に至っていない。

今回は、ここ数年間集中的に進めてきた渡邊滋あて坪井正五郎書簡の整理がようやく一区切りついたので、その集成一覧と一部の内容紹介を行うこととしたい。

1. 坪井正五郎と辰五郎翁、二代目校長滋

つばい しょうごろう

坪井正五郎（理学博士）は、近代日本の人類学、考古学の開拓者として知られている。

この坪井正五郎が本学草創以来校祖辰五郎翁、二代目校長渡邊滋と深い交流があり、二人の学校運営に折にふれ助言指導・協力を行い、大きな支えとなっていた人物であることはあまり知られていない。辰五郎翁は、明治40年5月死を迎える数日前に那珂通世（東洋史学者 1851～1908）、塩澤昌貞（経済学者 1870～1945）¹⁾とともに枕頭に坪井正五郎を招き、後事を託したほど親交と信頼を寄せていた人物である。また、二代目校長滋（1877～1964）は、辰五郎翁の遺言によりこの三人を学園の相談役に委嘱し、運営・人事の細部にわたってさまざまな助言指導を受けている。

坪井正五郎（1868～1913）は江戸両国の生まれ、父信良は幕府奥医師、祖父は蘭学者坪井信道という学者一家であった。大学予備門在学中、E. モースの大森貝塚発掘に遭遇し考古学・人類学への関心を高め、1881年東京帝国大学理科大学動物学科に入学、在学中84年に有志をあつめて人類学会を創設した。86年卒業後同大学院に進学、人類学を専攻し、88年終了後同大学助手となり、翌年からイギリスに3か年留学、92年帰国後帝国大学理科大学教授に就任し人類学を講ずるかたわ



坪井正五郎博士



二代目校長 渡邊 滋



那珂通世博士

ら全国各地の学術調査や発掘調査を行い、弥生式土器の発見・報告等数々の成果を上げている。日本の先住民族はアイヌ伝説に出てくるコロポックル人だという奇抜な学説で学会や世間にセンセーションを巻き起こしたことはあまりにも有名。1911年欧米に派遣され遊歴中、13年（大正2）ロシアの首都ペテルスブルクで開催された万国学士院連合大会出席中に病を得て客死した。

辰五郎翁がどういう経緯で坪井正五郎と懇意になったのか、その詳しい事情は詳らかでない。推測するに、房総の地において辰五郎翁の優れた教育者としての才能と実力を見出した、歴史学者であり教育者でもあった那珂通世が仲立ちした可能性が高い。

那珂通世（1851～1908 文学博士）は日本の近代東洋史学開創の第一人者と評価される人物である。岩手県出身で、旧姓藤村氏、盛岡藩儒那珂梧楼（江幡通高）の養嗣子となり、のちに「那珂姓」を名乗った。藩校を経て慶応義塾に学び、千葉県師範学校長、同女子師範学校長、東京女子師範学校長等教育現場を歴任し、東京高等師範学校教授、東京帝国大学文科大学講師を務めるかたわら東洋史研究を深め、日本・朝鮮・中国史の比較研究を通じて日本紀元の誤りを指摘し、また『支那通史』を著すなど多くの業績をのこしたことで知られる。

那珂通世と辰五郎翁との出会いは明治12年（1879）以前にさかのぼる。辰五郎翁は明治7年（1874）町に請われて前年開設された長南小学校で裁縫を教えて実績をあげ、その評判を聞いた隣町鶴舞小学校の主席訓導江尻庸一郎²⁾の要請により明治11年に同校でも無報酬で隔日授業を行うこととなった。長南小学校時代にすでに考案導入していた袖型・褌型、雛形尺（明治7年）や裁縫掛図（同10年）を用いての一斉教授による斬新な教授法の成果が次第に県内教育界に聞こえるようになり、当時千葉師範学校長の職にあった那珂通世の耳にも入ったものである。実際には評判の伝聞のみではなく、鶴舞小学校の江尻主席訓導や当時の長南小学校校長でのちに郡視学となった小出三平³⁾などによる教育現場からの実況報告等もあったのであろう。辰五郎翁の教育者としての才能と実力を評価した通世は、明治12年千葉師範学校長と兼務で女子師範学校を開設する

際に、裁縫はもとより女子教育の効果と充実を期して辰五郎翁を同校の教師補に招じ、期待通りの成果をあげ、以後歩みをとともにすることとなった。明治14年、通世が東京女子師範学校長に転じた時、辰五郎翁は請われて同校の裁縫科教員として5月に着任する。住居を本郷区湯島4丁目3番地に構え、私塾「和洋裁縫伝習所」を開いたのは、その年の4月のことだった。

以来、那珂通世と辰五郎翁の公私にわたる親密な交流が続き、明治19年（1886）通世が東京女子師範学校長の職を解かれたとき、辰五郎翁もともに辞職し、併せて辞職した教員や同志の手島精一⁴⁾、中川謙二郎⁵⁾等と図って「共立女子職業学校」（現共立女子大学）を設立している。

こうした活動の中で東洋史学者として着々と実績を上げていた通世は、新進の人類学者として活躍していた坪井正五郎を知り交流を深めたものと思われ、その縁で辰五郎翁にも紹介することになったのではないかと推測される。

ちなみに坪井正五郎が校史に登場するようになるのは、これまでのところ明治37年（1904）東京裁縫女学校（明治25年和様裁縫伝習所より東京府の認可を受けて改称）の科外講師として名を見せるのが初見で、以後44年まで毎月2日「諸人種服飾論」を講じていることが確認される。この科外講義は、すでに東京帝国大学理学博士の籍にあった正五郎の指導を受けて、辰五郎翁の次女「薫」が主任となり明治37年から毎週2回アイヌ・台湾・琉球・支那・朝鮮等の服飾研究を進めていたものの延長として企画されたもののようである。この間正五郎は、明治40年5月26日辰五郎翁逝去後ほどなく、その遺言により二代目校長滋の要請を受けて那珂通世、塩澤昌貞とともに東京裁縫女学校の相談役に就任している。

正五郎と滋が親しく頻繁に接触するようになったのは相談役就任以後のことと思われ、このことは別にあげた滋宛坪井正五郎書簡一覧の差出年が明治41年以降に集中していることからもうかがい知られよう。

2. 書簡一覧とその概要

二代目校長渡邊滋宛の坪井正五郎書簡は、別表のとおり21通ある。

明治41年4月6日から同45年6月27日まで年紀の明らかなもの11通、年不詳のもの10通、No.21を除いてすべて封筒付きで、郵送されたものは切手（菊丸三銭赤）・消印付となっているが、一部切手を切り取られているものもある。

宛先渡邊滋の住所は「（東京市）本郷区東竹町三十五」⁶⁾、発信者正五郎の住所は「東京市本郷区西片町十いノ十一」、内容的には私的なものが大半だが、いくつかは学校運営に直接関わるもの、あるいは滋の研究テーマ「針」に関わるものなどがあって注目される。公開して差し支えなさそうなものをここに紹介し、簡単な解説を付けてみよう。

二代目校長渡邊滋あて坪井正五郎書簡一覧

No.	年 紀	内 容	形 態	整理番号	備 考
1	明治41. 4. 6	実母逝去の知らせ	巻紙（3紙紙継） 封筒付	資雑学799	
2	明治41. 5. 27	辰五郎翁追悼録受領礼状	巻紙（3紙紙継） 封筒付	資雑学800	
3	明治42. 5. 27	もてなし・相撲見物礼状	巻紙（2紙紙継） 封筒付	資雑学801	
4	年不詳. 6. 13	無試験資格認定の件	巻紙（3紙紙継） 封筒付	資雑学802	
5	明治42. 8. 21	7月会計報告・版權等返信	巻紙（2紙紙継） 封筒付	資雑学803	
6	明治42. 10. 22	御馳走礼状・9月分謝礼辞退状	巻紙（2紙紙継） 封筒付	資雑学804	
7	明治42?. 8. 27	高岡・富山方面旅行報告	巻紙（4紙紙継） 封筒付	資雑学805	封筒5.21日付
8	明治43. 6. 17	紹介地所の件	巻紙（2紙紙継） 封筒付	資雑学806	
9	年不詳. 5. 2	もてなし礼状・職員注意の件	巻紙（2紙紙継） 封筒付	資雑学807	
10	年不詳. 10. 17	渋柿園宿所の件	巻紙（2紙紙継） 封筒付	資雑学809	
11	明治43. 10. 18	古代針の件	巻紙（3紙紙継） 封筒付	資雑学810	
12	明治43. 12. 23	漆画の件	巻紙（2紙紙継） 封筒付	資雑学811	
13	年不詳. 10. 17	不在謝辞・祝賀会の件	巻紙（2紙紙継） 封筒付	資雑学812	
14	明治45. 6. 27	招待礼状・地所斡旋依頼	巻紙（2紙紙継） 封筒付	資雑学813	
15	明治45. 6. 29	招待礼状・地所斡旋依頼	巻紙（3紙紙継） 封筒付	資雑学814	
16	年不詳. 6. 23	太古エジプト相撲画の件	巻紙（2紙紙継） 封筒付	資学雑815	
17	年不詳. 7. 30	教員会みなみな様宛礼状	巻紙（2紙紙継） 封筒付	資学雑816	
18	年不詳. 10. 6	招待礼状・子供不参断り	巻紙（2紙紙継） 封筒付	資学雑817	
19	年不詳. 6. 26	金子受取礼状	巻紙（2紙紙継） 封筒付	資学雑818	
20	年不詳. 5. 21	音楽会番組送付状	巻紙（2紙紙継） 封筒付	資学雑822	滋、薫宛
21	年不詳. ?. 30	旅行日程連絡	1紙 封筒なし	資学雑823	

*一覧に示した書簡は昭和46年9月22日付で渡邊滋の次男 渡邊博氏より本学へ寄贈された。

*年不詳の書簡の年紀については、渡邊滋の四男であり本学受入時に整理を行った渡邊篤氏の整理番号を基準とした。

(1) 辰五郎翁追悼録受領の礼状 リストNo.2

資雑学800 明治41・5・27付け 昭和46年9月22日 渡邊博氏寄贈

封筒（上部欠） 18.7（縦）×7.5（横）cm

切手 菊丸三銭（赤） 消印 丸二印 「本郷／41. 5. 27／前10－11」

本紙三紙紙継 全長149.2×縦18.2cm
（第一紙45.2、二紙59.4、三紙44.6cm）

[封筒]（表） 本郷区東竹町三十五

渡邊 滋様

（裏） 五月二十七日

✂ 本郷西片町

十いノ十一

坪井正五郎

[本文]

昨日は途中御引き

止め申失礼致し

ました。追悼録

讀めば讀むほど

御亡父様の面影

もしのばれて人々

能景慕^{ママ}の情も

察せられ悲ミの間

一種美しき感に

打たれ御頒與

の御好意を深

く謝しま須。彼

書は経典として

見る價值十分

と存じます。伺ふ

所によれば未製

本の分何程か

残り居るとか若

し出来ますならば

其分には傳の終

に添へられた系図

一覧を省く事に

されては如何。(要点は傳記

二一三以下で

明か故重複

の嫌もあり)

親近の人々に示す

は宜しけれどさも

無き人達に余りに

精しく内部の

事を知らしむるは

如何ならんか一考を

要する事と思ひ

ます。系図は系図

で取り置きて幾

らも役に立つもの故

印刷になりたる分

は其俣別に保

存し置かれても宜

いござりませう。

綴じ込んだものを

取り去るとて別に

甚しい手数を要

するでも無し既

に製本済ミならば

贈られ或は頒た

れる人に由りて御

取捨可然かと存

じま須。ふと感じ

たるまま御参考

までに申し上げます。

強為て主張すると

云う訳でもございせんが

思う所が自然

筆紙に現れた

のでござりま須。

意見御採否

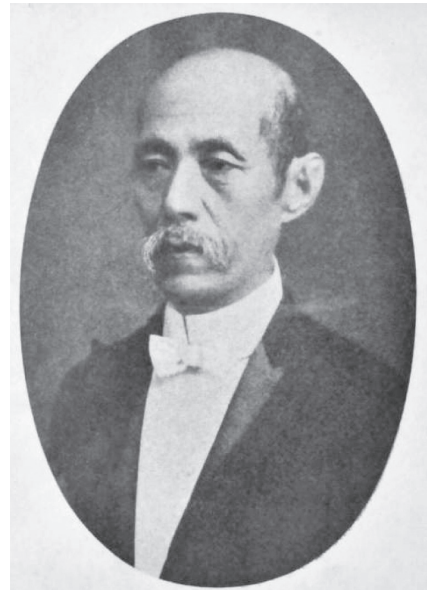
固より御随意

五月二十六日夜認 坪井正五郎

渡邊 滋様

【解説】 辰五郎翁（明治40年5月26日逝去）没後1年後の明治41年5月24日に発行された『渡邊辰五郎君追悼録』の受領礼状で、投函日は明治41年5月27日午前中。

故人を偲ぶところの内を吐露しながら、巻末に添付された「渡邊家系図一覧」（辰五郎年譜次頁、A4版変形、洋紙一紙、30.2×15.0cm）について所感を述べ、その取扱いについて助言をしている。具体的には、あまりにも私的な事柄故親近者に配るには差し支えないものの、ひろく知音の人々にまで目に入れるべくものではないことを指摘している。この助言はただちに滋に受け入れられたものらしく、本学博物館に所蔵される数冊の『追悼録』には系図が添付されているものと無いものがあることから、そのことが知られる。こうした細々したことについても、正五郎が滋に助言していたことが知られて興味深い。



校祖 渡邊辰五郎翁

(2) 無試験資格認定の件 リストNo.4

資雑学802 年不詳 昭和46年9月22日 渡邊博氏寄贈

封筒（上部欠） 20.1（縦）×7.8（横）cm

切手 欠

消印（3/4欠） 丸二印 「－／－．－．－3／－－12」

本紙三紙紙継 全長111.8×縦18.9cm
（第一紙25.1、二紙59.1、三紙27.6cm）

〔封筒〕（表） 本郷東竹町三十五

渡邊 滋様

親展

（裏） 六月十三日

✂ 本郷西片町十いノ十一

坪井正五郎

〔本文〕

昨夜學士院で

上田氏に會ひました

から兼ねて御話

しのありました事

に付き意見を聞
きました所成規
の順序を経て来た
生徒を収容する
専門學校程度
のものを完成する
を期する他資格
を得る便法無かる
べく沢柳氏も病
氣全快にて帰京の事
故此方の事は遠か
ら須して行はれる
様に成るであろうと思
はれる、併しそれが出来
たにしても二三年
續けて検定試験
成績良好と云ふ事
が認められるので無け
れば無試験と云ふ事
は行はれ須要は
信用を博すにある。
實際良いとの事が分かり
さへすれば自然便宜
も得易き訳なれど
初めよりそれを豫期
する事はむつかし
検定委員云々の事も
急かに思ふ通りに
する事は難し何
にしても実力を養
ひ世の信用を厚くする
が急務である。世間
には随分地位上の
便宜や知人の関係
を濫用して出来まじき

事をも仕方によりては出
来るかの如く云ひ拵へ
人を過つ者無きにも
限ら須巧言にまよは
されぬ様万々警告
して置く方が宜かろうとの
事でありました。以上
大要を記しましたが
不足の点は御面談
の機を待って補ふ事
に致しま須。



上田萬年博士

六月十三日 坪井正五郎

渡辺 滋様

【解説】裁縫科教員資格の無試験認定に関する書簡である。辰五郎翁並びに二代目校長渡邊滋は、教え子が卒業後郷里等に戻り裁縫学校の設立や小学校・中・高等学校等の教職に就くものが多いことから、裁縫科教員資格無試験認定の実現を早くから考えていたようである。この事については度々正五郎に相談していたようで、正五郎は折にふれ関係者に意見を聞き、実現の可能性について打診をしていた様子が本書状によって明らかにされる。

文面にみえる^{うゑだ かずとし}上田萬年（1867～1937）は現代国語学の生みの親とされる言語学者で、尾張藩士上田虎之丞の長男として江戸に生まれ、東京府第一中学校変則科を経て帝国大学文科大学に入学、B. H. チェンバレンに言語学を学び大学院終了後ドイツ・フランスに留学し研究を深め、1894年帰国後帝国大学教授に迎えられ博言学講座を担当、98年文科大学内にはじめて国語研究室を開き、翌年文学博士となる。以後定年まで同大の国語学教授を務め多くの教え子を育成する傍ら、98～1902年文部省専門学務局長兼同省参与官（1899年まで）、00年11月実業学務局長事務取扱（翌年3月まで）、12年文科大学長、19年神宮皇学館長等も務めるなど文部行政にも通じ、数々の実績をのこしている。晩年の一時期本学財団法人の監事に就任していたことが、『創立五十年史渡邊学園』（昭和5年10月刊）に見え、二代目校長滋とも親交があったことが、本学博物館に収蔵される上田の滋宛書簡によって明らかにされる。

また、文中で上田萬年が名をあげた「沢柳氏」は、成城学園の創立者として知られる^{さわやなぎまさたろう}澤柳政太郎（1865～1927）のことで、文部官僚として近代教育制度の充実と改革に腕をふるった人物である。信州松本藩士澤柳信任の長男として松本に生まれ、同所の開智学校下等小学校、東京師範学校付属下等小学校、東京府第一中学校変則科に学び、大学予備門を経て帝国大学文科大学哲学



澤柳政太郎

科を1888年に卒業、文部省給費生であったことから文部省に入省し文部官僚の道を歩み、上田が98年文部省専門学務局長兼同省参与官になった同じ年、澤柳は普通学務局長に就任している。以来澤柳は省内の各種委員会にも参画し数々の実績を上げ、省内に確固たる地位を築き、1908年文部次官を最後に退官しているが、上田とは東京府第一中学校変則科で同級生であったこともあり、公私ともに親しい関係にあったことがうかがわれる。

辰五郎翁及び滋の念願であった裁縫科教員資格無試験認定は、辰五郎翁没後5年後の明治44年（1911）4月27日、文部省より高等師範科卒業生に対して中等学校裁縫科教員資格の無試験検定の認可を得ることで実現された。

これに至るまでには学校側もさまざまな努力をしている。当書簡のなかで上田が正五郎に「成規の順序を経て来た生徒を収容する専門学校程度のを完成するを期する他資格を得る便法無かるべく」、「併しそれが出来たにしても二三年續けて検定試験成績良好と云ふ事が認められるので無ければ無試験と云ふ事は行はれ須要は信用を博すにある。実際良いとの事が分かりさへすれば自然便宜も得易き訳なれど、初めよりそれを豫期する事はむづかし、検定委員云々の事^にも急かに思ふ通りにする事は難し、何にしても実力を養ひ世の信用を厚くするが急務である」と説いたように、無試験認定獲得への実績づくり・環境作りが必要であった。その実績・環境作りをめざして進められた本学の教授科目及び学科編成の改正をたどってみると、ほぼ以下になる。

- 明治14年（1881）和様裁縫伝習所設立当初、和洋裁縫、礼法、点茶、生花、造花、刺繍の6科目であった教授科目を、同29年（96）東京裁縫女学校と改称するに併せて、修身、教育、家事、習字の4科目を加え10科目としている。当初の6科目は、いわゆる家庭にあつての「良妻賢母」の育成をめざした編成であることは明らかだが、29年東京裁縫女学校改称に併せての修身、教育、家事、習字4科目の追加は、その内容からみて教員養成にシフトを移したことがうかがわれよう。卒業生の進路状況や生徒・社会からの要望をふまえての改正と考えてよいであろう。
- 同32年（1899）校舎を東竹町34・35番地へ移転するに併せて国語、算術、英語、編物の4科を加え、造花を廃し13科目編成とする。教員養成へのシフトがいっそう明確となった。
- 同35年（1902）1月初めて教員養成会を開設。教員を希望する生徒を対象に、会期6か月、教科は裁縫教授法、家政、国語、算術、教育の5教科。以降この講習会は同年7月、明治36年1月、同37年3月、同38年2月と5回にわたり開会された。師範科設置の地ならしとなったであろう。
- 同37年（04）29年に追加された家事科を必須科目とする。
- 同39年（06）、教員養成を期して師範科を増設。14歳以上、高等小学校卒業生、修業年限1年。

教員養成会は中止されたが、その後明治40年4月に第6回が開催されている。

- 同41年（08）3月、教員養成を本校の主目的として高等師範科（16歳以上、高等女学校年限4か年卒業者及び小学校本科正教員免許状所有者、修業年限3年）・同別科（16歳以上、高等学校卒業者、修業年限3年）・速成科（14歳以上、裁縫の素養のある者、修業年限6か月）を設置。師範科、教員養成会は廃止となる。この他、本科、普通科、高等科、専攻科があった。
- 同42年（09）1月、旧師範科を普通師範科として復活。高等小学校卒業以上、修養年限2年とし、小学校・中学校教員資格養成を目的とする。
- 同年4月、高等師範科、同別科、普通師範科卒業生は中等教員試験検定受験資格を認定される。（明治41文部省令第32号「教員検定試験に関する規程第6條第2号」による）
これにより無試験認定への道が拓かれる。

- 同44（11）4・27、**高等師範科卒業生の中等学校裁縫科教員資格無試験検定認可が実現。**

私立学校の裁縫科無試験検定の嚆矢となる。別科、普通師範科は中等学校裁縫科教員受験資格の認定をうける。

以上のような経過が確認されるが、この実現の裏には、坪井正五郎を介して文部行政の中樞で各種学校の学制や教育内容の充実改正に努めた上田萬年、澤柳政太郎等の強力な指導と支援があったことが想像される。この時すでに両者は文部省を退官しているが、上田が専門学務局長兼同省参与官、澤柳が普通学務局長時代に軌道を敷いた師範学校や専門・実業学校諸制度の整備・充実が、こうした成果を導いたものと理解して差支えなからう。

ちなみに本書簡は差出年を明にしない。ただし上田が文中で述べた「沢柳氏も病氣全快にて帰京の事故、此方の事は遠から須して行はれる様に成るであろうと思はれる」の記事によって、その年を割り出せそうである。澤柳政太郎の年譜によれば、彼は文部次官の職にあった明治41年（1908）の年頭より腸チフスを患い3ヶ月ほど入院している。上田のいう「沢柳氏も病氣全快にて云々」はこの事に関わるものとみてよく、差出年はこの明治41年と判断してほぼ間違いなからう。年頭から3ヶ月の入院であれば退院は4月、職場に復帰してしばらくのことと見れば、正五郎の差出月日は6月13日なので状況的にも符合する。

(3) 古代針の件 リストNo.11

資雑学810 明治43・10・18付 昭和46年9月22日 渡邊博氏寄贈

封筒（上部欠）21.0（縦）×7.9（横）cm 水濡れによる染みあり

切手 菊丸参銭（赤） 左上隅欠

消印 丸一印 「本郷／43. 10. 18／前8－9」

本紙三紙紙継 全長80.0×縦18.2cm

（第一紙14.6、二紙59.6、三紙5.8cm）

[封筒]（表） 本郷区東竹町三十五

渡邊 滋様

(裏) 十月十八日投函
✂ 本郷西片町十いノ
十一
坪井正五郎

[本文]

過日御目にかかり
ました節日本太
古の針の事は実
物によりて証明する
事むつかしと申し
ましたが好く考へ
ました所古墳から
発見された事が有
ったのです現物は
博物館倉庫内にある
ので近日柴田氏に
調べて貰ふ様に今日
頼んで置きました。
朝せんの古墳からも
針が針入れに入れた
まゝで発見された事
がありま須之は今日
見たのですが此事
も柴田氏に調べ方を
依頼して置きました。
実物御覧御希望
ならば所蔵者方へ
御案内致してもよろし。
其人の家は四ツ谷塩
町で電車の便がある
のです。裁縫総論
二十日までに御執筆
との事を伺ひました
から針は古墳からも出て
居るとの事何等かの

御参考にもと存じ

急ぎ御報告申し上げます。

十月十七日夜認

坪井正五郎

渡辺 滋様

【解説】 二代目校長滋は、早くから針に関心を持ち、その研究を進めていた。本書簡はそれに関わるもので、古代針の問い合わせに対する正五郎の回答である。

過日面談の折には、古代針について実物で証明する事は難しいと伝えたが、古墳から出土した事例があること、また朝鮮の古墳からは針筒とともに出土した例がある事を確認したとの内容である。

文中に出てくる「博物館」は東京帝室博物館（東京国立博物館）のことで、「柴田氏」は明治・大正・昭和にわたって関東地方を中心に歴史・考古・文化財分野で多くの業績を遺した柴田^{しばた}常恵^{じょうけい}とみて誤りなかろう。

柴田常恵（1877～1954）は、愛知県春日井郡大曾根村（名古屋市東区）の真宗大谷派瑞忍寺の三男に生まれ、東京文京区の私立郁文館中学内史学館に学び、1901年台湾総督府学校講師、02年東京帝国大学雇を経て06年東京帝国大学人類学教室助手となり、以後20年内務省地理科嘱託・史跡名勝天然記念物調査会考查員、21年東京帝国大学文学部標本調査嘱託、29年慶応義塾大学講師、36年重要美術品等調査会委員・帝室林野局嘱託、50年文化財専門審議会委員等を歴任し、関東をはじめ全国各地の歴史文化の調査・保存に大きな功績をあげ、54年12月1日77歳で逝去した。明治42年（1909）東京深大寺の元三大師堂床下から白鳳仏銅造釈迦如来倚像を発見した人物としても知られており、本学名誉教授樋口恵子女史の父君でもある。

東京帝国大学人類学教室助手時代に坪井正五郎の指導を受けており、その伝手から正五郎は滋からの問合せ内容の確認を常恵に依頼したのであろう。

二代目校長滋が針の研究をはじめたのは明治40年頃からのことで、あわせて父辰五郎翁の「雛形尺」開発の影響もあってか、尺度の研究も進めていたようである。針の歴史をひもとくために文献資料のみならず実物資料にも探索の手をのばしていたことが、この書簡の内容からうかがえよう。当時の帝室博物館に所蔵されている古墳出土の針の確認や、民間のコレクターの紹介等以後の研究の基礎資料となるような考古・歴史分野の情報を正五郎から得ていたことが知られる。

この研究の成果は、まず大正4年（1915）に23頁の小冊子『針の研究』（同年3月24日発行、発行所私立東京裁縫女学校出版部、大正7年2月25日再版）としてまとめられた。この小冊子中頁3、二、針の沿革の章に「（前略）数年前本校で手に入れた、朝鮮の古墳から掘り出したと云う針は、大凡七百年程以前のものと鑑定せられて居るが、其形状は現今のものと、殆ど同様のものである（後略）」とみえる。あるいはここにいう本校所蔵の朝鮮古墳出土の針は、本書簡中で正五郎が紹介した四ツ谷塩町のコレクターが所持していたものを譲り受けたものではないかと推測されるが、残



『訂正増補針の研究』1921



『日本縫針考』1944

念ながらこの針は、大正12年の関東大震災で焼失してしまっていて現存しない。

次いで大正10年に『訂正増補針の研究』が刊行された。4月15日の発行で、発行所は文部大臣認定東京裁縫女学校出版部、中表紙には誌名、発行所名とともに「東京裁縫女学校長、文部省裁縫科教授事項取調嘱託員渡邊滋著」の表記がある。総頁数241頁、大正10年2月付の緒言3頁、口絵4葉、目次第一篇総論及び歴史からはじまって第二篇産地、第三篇製造、第四篇普通の針、第五篇特殊の針、第六篇針の付属品、第七篇応用、第八篇雑載におよぶ、これまでの研究の集大成といっ

てよい。本書の直接の刊行のきっかけは、大正10年3月東京教育博物館（現国立科学博物館）で開催された「鉱物文明展」にあたって、当時の館長棚橋源太郎（1869～1961、理科教育指導者・博物館学者）からは是非出版して出陳せよとの要請があったことによることが、本書の緒言および昭和19年に刊行されて『日本縫針考』の自序から判明する。

『日本縫針考』は昭和19年（1944）11月3日発行、発行所は東京新橋の文松堂出版株式会社、中表紙、口絵5葉、自序2頁、目次9頁、本文218頁からなる。本書の自序（昭和19年元旦付け）は、これまでの針の研究や尺度の研究について顧みる記述があり、これらの研究に対する滋の想いと歩みが知られて感慨深いものがある。

これによれば、『日本縫針考』は先に出版した『訂正増補針の研究』の残本・紙型が大正12年（1923）9月1日の関東大震災でいっさい焼失してしまったことをうけ、秋山雅房の小嶺喜太郎の要請により、多少の増補訂正を加え書名も改題して発行した、とある。つづけて本書の作成にあたって協力支援を受けた諸士を列記するなかに、『渡邊辰五郎翁傳』（昭和4年3月20日刊、渡邊校友会発行）の著者で本校の幹事でもあった新治韜堂吉太郎（1865～1936）が自分の研究の如く専心助勢してくれたことを感謝する旨が記されている。また文末において、併せて進めてきた「尺度の研

究」は、本書の姉妹編として出版すべく震災前までに標本二百数十種、原稿一千余枚までこぎ着けていたが、やはり一切が灰燼に帰してしまったので、再開すべきすべもなく中止することにした旨を、断腸の思いで述べている。時に滋68歳、明治40年以来積みかさねてきたライフワークの一つを、このような形で終わらせる無念は察してあまりあるものがある。

ちなみに針に関する単行本は以上だが、これら以外に研究成果の一端を講演・記述したものが散見する。

一つは『裁縫科講演集 第壹輯』（大正6年4月18日刊、発行所文部大臣認定私立東京裁縫女学校出版部、販売所東京日本橋文盛堂榊原友吉）で、大正6年3月26日付の「はしがき」によれば、前年の大正5年11月から2か月にわたり開催された東京市教育会主催の小学校裁縫科教員講習会並びに同年12月から当年1月まで開催された東京府荏原郡教育会主催の裁縫科教員講習会での講演内容を筆記印刷したものである。まず、本文文頭〈教授用具〉の章で「針」の基本認識にふれ、つづけて「針と糸の関係」、「針と糸の標本」を説き、文末〈研究〉の章で「古書に表はれたる針及針に関する事項」から「昔の針屋」、「針の産地」、「針職及針の選択」、「通常針の種類」、「印針の種類」、「刺繍の針」、「メリケン針」、「乙女針」、「針の包紙」、「児童用の針」、「日本針とメリケン針の比較」、「針の製造法」の13項目にわたって懇切に解説している。大正10年に刊行された『訂正増補針の研究』のひな型は、ほぼこの時に出来上がったのではないかと推測される。

いま一つは、大正13年（1924）10月5日に発行された『裁縫教授改善資料』（発行所東京裁縫女学校出版部）である。中表紙には「専門教育／裁縫全書／裁縫教授改善資料／渡邊滋著／東京裁縫女学校出版部発行」とあり、「はしがき」（同年8月付）によれば、上記講演集の訂正増補版として著したもので、文部省裁縫科教員事項取調嘱託として全国を視察研究した成果を基に、主に中等学校・専門学校に係わることに意を用いて編纂したとみえる。

目次4頁、本文184頁からなり、文頭「著作の趣旨」で『裁縫科教員ほど改善進歩の遅々たる学科は恐らく他にあるまい』と日頃の持論を述べたあと、「針」、「針と糸との関係」、「針と糸との標本」に触れ、後半で「運針」及び「針の研究」を説いている。「針の研究」の章は既刊の同書名誌のごく簡便なダイジェスト版といった感があるが、頁数は100頁から126頁におよび、製造の項〈針^{かぶと}頭の細別〉、普通の針、特殊の針、針の始末及び保存、針の怪我、児童用の針など教育現場に有効な実内容的な内容となっている。

「針」の研究を、実践の場から総合的に追及し整理体系づけたのは、おそらく我が国では渡邊滋が初めてではないかと思われる。関連文献を検索しても名があがらず、滋の著作の中にもそれらしき既刊の研究書名が参考文献としてあげられていないことから、そのことがうかがえる。多忙な校務の余暇をさいて関連書誌の渉獵や専門家・知人からの聞き取り等をつみ重ねた労力は、なまいたいていのものではなかったと推察される。いま改めてその功を評価すべきように思われる。

滋以後、針に関するまとまった著述としては昭和31年4月に大阪の縫針製造会社「クロバー裁縫具本舗」経営者岡田敏雄が『針—この小さきもの—』という小冊子を出版している。その著述の大半は滋の研究を下敷きにしており、同書の「まえがき」にもそれについてのことが述べられて

いる。この小冊子は非売品であり、業界や関係者以外には配布されなかったようで希少本となっているようだが、当博物館には、滋本人から寄贈された一冊が架蔵されている。おそらく著者から献呈されたものであろうが、書中の誤字等を小さな文字でていねいに訂正している箇所が散見し、いかにも滋の人柄と心遣いがうかがえて微笑ましい。同書は、その後昭和41年11月に『ぬい針—この小さく偉大なもの—』と改題され、内容も著者岡田敏雄の自伝や戦後の業界動向・情報等を加えた増補改訂版として東京の朝日書院から刊行されている。定価500円、著者の「まえがき」に、全国の書店の店頭に一冊も針に関する本が並んでいない実情にうながされて、広く利用者の要望に応えるために本書を執筆したと記している。

事実、今日においても「針」に関する研究はめだって少ないように思われる⁷⁾。被服学界・服飾学界では、「針」への関心が薄いのであろうか。滋が築きあげた蓄積を、より深化・充実する人材の登場を期待したい。

おわりに

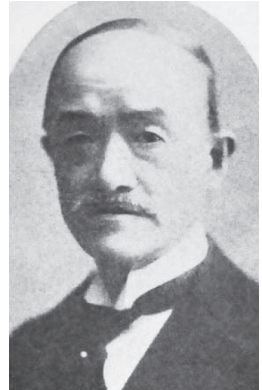
以上、二代目校長滋あて坪井正五郎書簡一覧と主だった書簡の内容について紹介を行ってみた。二人の交流が公私ともに密だったことは、家族ぐるみの相互訪問や相撲見物、地所の紹介斡旋等にまでわたっていることであろかがい知られる。これらの内容はすでにデータ化されているので、興味のある方は本学博物館に申し出ていただきたい。

ここに取りあげた書簡は、(1) 辰五郎翁追悼録受領の礼状と (3) 古代針の件が私的なもの、(2) 無試験資格認定の件が学校運営に関わる公的なものとなる。いずれもその内容を詳細に検討・追跡してみると、二人の緊密な信頼関係を背景に各事項にわたって親身・率直にやりとりしていることが分かる。ことに (2) については、女子教育機関としての学園の整備と充実にかける二人の真摯な想いが読み取れて、頭の下がるおもいがする。本学132年の歴史を顧みるとき、創立者辰五郎翁の工夫と努力を受け継ぎ、近代女子教育機関としての整備・充実に全力を尽くした二代目校長滋の働きの重さを、この書簡を通じてまざまざと認識することができる。

註

1) 塩澤昌貞 (1870～1945)

経済学者、法学博士。茨城県出身。本姓関氏。のち塩澤元孝の養子となる。はじめ国漢学を修めたが、のち東京専門学校（早稲田大学）英語政治科に入学、1830年卒業後1900年米国ウィスコンシン大学に留学、経済学を専攻しドクター・オブ・フィロソフィーの学位を取得。さらに01～02ドイツに留学しハレ大学、ベルリン大学で経済学・財政学の研究を進め、帰国後早稲田大学で経済学を講じた。かたわら同大学長、協調会付属社会政策学院院長等学内外の要職を務め、09年法学博士、34年帝国学士院会員となった。大隈重信の知恵袋との異名を持ち、経済・労働問題に優れた業績をあげた。



塩澤昌貞

『創立六拾季史』（昭和15年10月17日発行 発行者渡邊学園）巻末感謝録によれば、講師兼財団理事、元相談役とあり、「明治35年以来前校長（辰五郎翁）の輔佐として又前校長歿後は相談役となり、那珂通世博士、坪井正五郎博士と共に教育諸般に涉り盡力せられしこと尠からざりしも、大正十一年東京女子専門学校設置せらるるや生徒に教授して今日に及ぶ一三十八年」と紹介している。

2) 江尻庸一郎

詳細は不明。辰五郎翁の葬儀に会葬しており、肩書は山形県師範学校長とある。

3) 小出三平

詳細は不明。教育家。鶴舞藩士。長南小学校長を8年勤め、のち郡視学となった。

※『渡邊辰五郎君追悼録』（以下『追悼録』、1908）所収 千葉県静和女学校長白井勇次郎談「渡邊先生の経済観」、千葉県長生郡庁南高等小学校長古山修司談「渡邊先生と庁南小学校」による。

4) 手島精一 (1805～1918)

明治期の工業教育指導者。静岡県出身。沼津水野藩士田邊四友の二男に生まれ、幼名惇之介。同藩士手島右源太の養子となり、手島姓に改む。藩校盟親館で洋学を学び、明治3年（1870）渡米し建築学、物理学を学ぶ。岩倉遣外使節団の訪米時の通訳を務め、そのままイギリスに随行し同7年に帰国。翌年東京開成学校（東大）監事に就任、フィラデルフィア及びパリ万博等を視察し工業教育の重要性を認識する。同14年（1881）東京教育博物館長就任、併せて東京職工学校（23年東京工業学校、34年東京高等工業学校に改称、現東工大）の創設に尽力し、23年同校校長となり、以来26年間在職し多くの工業技術者を世に送り出した。この間明治30年（1897）文部省普通学務局長、同31年実業学務局長を務めるなど、教育現場・行政の両面から工業教育の整備・充実に貢献した。大正5年（1916）校長を退職し名誉教授となり、同7年1月21日、70歳で歿した。

（『朝日日本歴史人物事典』1994朝日新聞、『日本人名大事典』1979平凡社）

『追悼録』では、東京高等工業学校長の肩書で「渡邊翁ノ遠逝ヲ悼ム」の弔辞を述べている。

5) 中川謙二郎 (1850～1928)

明治・大正期の教育家。丹波桑田郡（京都府）出身。東京開成学校卒。新潟学校、学習院、東京女子師範学校の教諭を務め、明治34年（1901）文部省視学官となる。のち仙台高等工業学校長、東京女子高等師範学校長（現お茶の水女子大）を歴任した。

（『日本人名大辞典』2002講談社）

『追悼録』では、仙台高等工業学校長の肩書で弔辞を述べている。

6) 東竹町35番地

明治32年6月、辰五郎翁はこれまでの東京裁縫女学校の敷地が手狭になったことを受け、東竹町34・35番地に在ったキリスト教会が火災に遭い焼跡のままとなっていた土地を購入し移転した。ここも数年を経ずして生徒数増加により増改築の必要が生じ、34年8月には旧校舎の一部を4階建てに改築、37年4月には校長住宅の一部を取壊して3階建ての教室を増築している。これに連動して同年4月府下滝野川字中里に1,715坪の土地を購入し基本財産に充てており、のちに校長宅及び

寄宿舎が建つことになる。

- 7) 野口益栄「手縫針についての考察」(1968『文化女子大学研究紀要』第1号)がある。針の歴史、製造法、分類等は滋の域を出るものではないが、人間工学的考察への試みに新しさがある。

肖像写真出典

渡邊辰五郎, 渡邊 滋, 坪井正五郎, 那珂通世, 塩澤昌貞:『創立五十年史』学校法人渡邊学園発行
1930年

上田萬年:『卒業記念』(卒業アルバム)東京女子専門学校家庭科 1935年

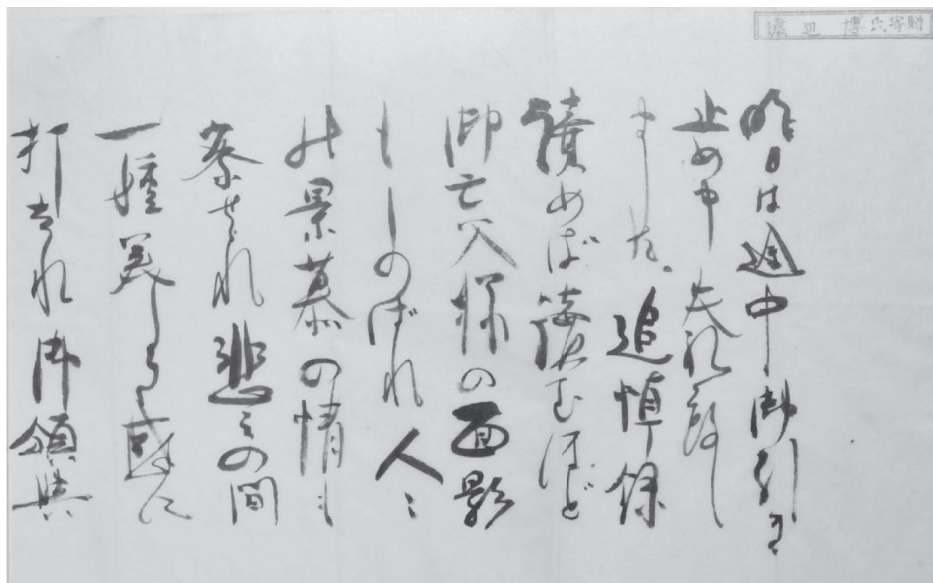
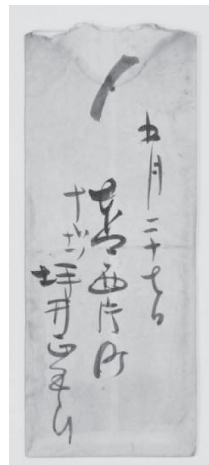
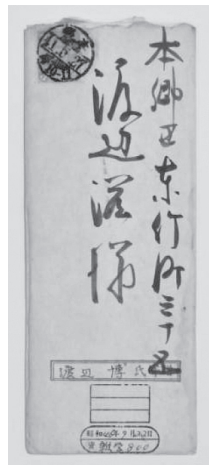
澤柳政太郎:成城学園教育研究所提供

[追記] この稿をなすにあたって、次の方々に御教示・御協力を賜った。お名前を記して感謝の意を表させていただく。(順不同、敬称略)

重田正夫 兼子 順(埼玉県立文書館) 成城学園教育研究所 東京家政大学図書館
当館三友晶子 鈴木桃子 湯川瑠以子 鴻池由香里 事務長太田八重美

図 版

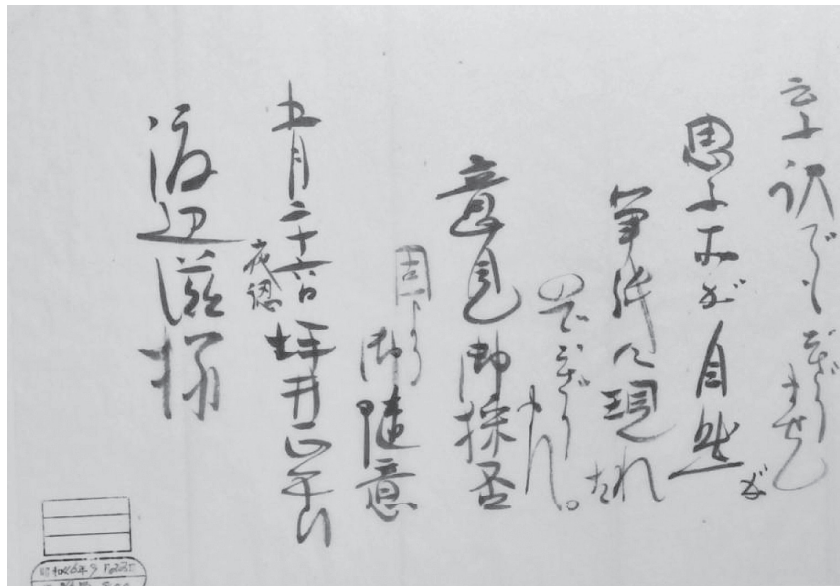
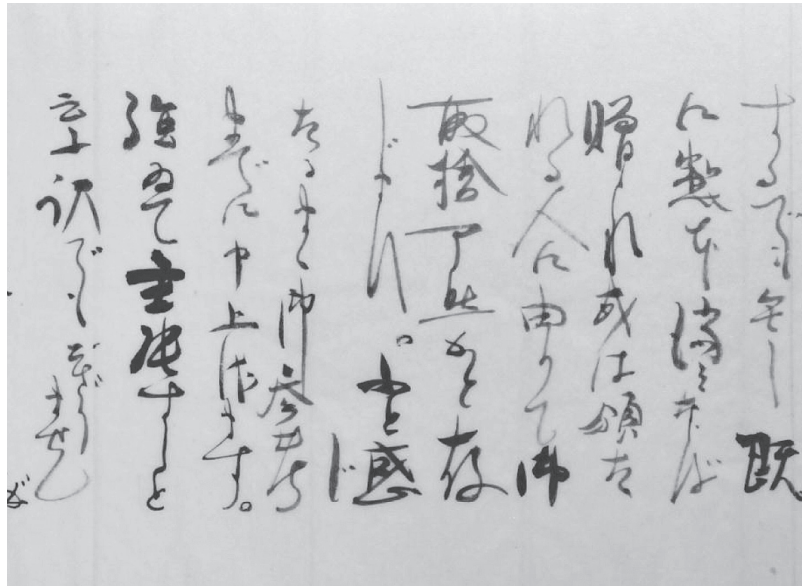
(1) 辰五郎翁追悼録受領の礼状



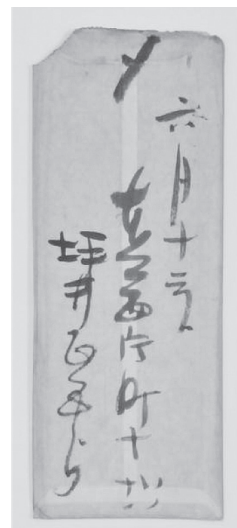
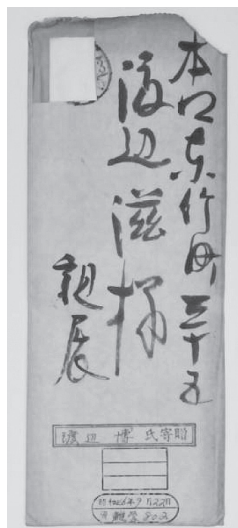
打ちぬれ片頌典
の師の意を深
く研ぎました。然
書は經典として
見れば価値十分
と存じます。同小
所にもなほ未製
本の分作程を
残り居るが、若
し出来れば、な
其分には傳の終

其分には傳の終
に傳へりた系圖
一覽を省くるに
ふれはむ。
親近の人を示す
は軍の要なり
各人達に今
精しく内部の
事を知らしむは
最もしか一書を
要すると思ふ

要するものと思ひ
 ます。東國の東國
 で取り置きで我
 らに幾ん立つもの
 印刷んが、今
 は其印刷の保
 存に置かれて、
 いまどい、
 幾んか、
 取り置きで、
 甚い、
 既



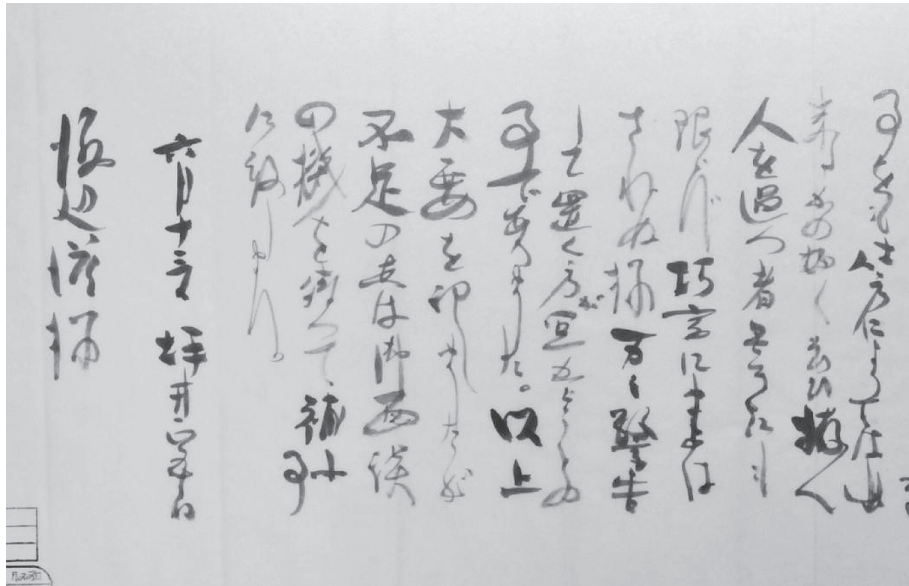
(2) 無試験資格認定の書簡



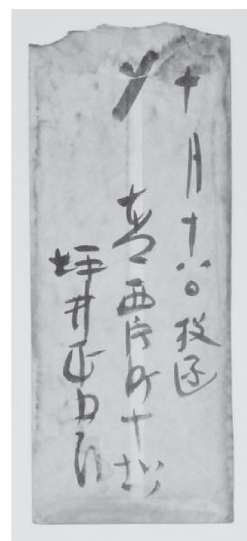
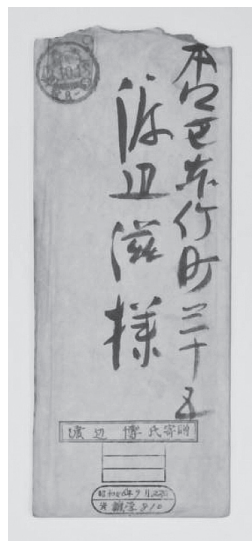
以東 孝子院下
 上田氏 今もいまだ
 其の空沙汰
 のまじりたる
 に付て老金を開
 けしむた所成規
 の昭示を経て来
 生縁を収容する
 所門並に程々
 のりをと完成す
 を期す。他資格
 を得る候迄とさ
 へく休養より病

ては、松竹あり病
氣全快き事のみ
ぬけ方の遅きは
行けり
極むる下あり思
はる、併、それ
を、
左に、二三年
経けて、松竹試
成、後、良ぬとす
が、
か、
は、
信用を、
家、

素心良しありて人々を
 導くは自然の便也
 一徳ありて沢をわく
 初めより人を接し
 するはむづかし
 捨てて安んずるは
 容易に思ふ通り
 するは難し
 一徳ありて實力を養
 ひ世の信用を厚くす
 るは勢であり世間
 には随分地位上の
 便宜や友人の関係
 を活用して出来ぬ
 事なり



(3) 古代針の書簡



昨日月により
古の針のさか突
ぬにとも 証の字
るむつりしし
中たぬぬくをく
すた所古墳を
我見されるる有
ふたのです現ぬは
切ぬは金庫内い
の下近の里田氏に
調てせふ所に今

調てせふ所に今
ねんを置きた
おろの古墳を
針が針入れた
すむをえされ
なちりる之は今
りたのですは
し柴田氏に調て
依頼して直り
実ぬは切希
たは行な者方へ
井案内に
其の家は
町で電車の便

町で電車の便
すむを置きた
おろの古墳を
針が針入れた
すむをえされ
なちりる之は今
りたのですは
し柴田氏に調て
依頼して直り
実ぬは切希
たは行な者方へ
井案内に
其の家は
町で電車の便

おは様

十月十七日
坪井正五郎

